

# 我々は集団で追い詰められたとき、集団で覚醒する：プーチンの言葉の意味

Greatchain

2018/10/30

人類滅亡の危機というものに、何かの意味があるのか？ 全く無意味なのか？ 我々はそのような立場に追い詰められないと、何かに目覚めることができない。「ヴァルダイ討論会」というロシアの年中行事で、プーチン大統領は非常に重要な一言を語った。核兵器にせよ何にせよ、人類が滅びなければならないような戦争に、我々が挑発されたら、我々は戦い、敵を滅ぼして我々も死ぬだろう。しかしその場合、相手は無意味に「犬のように死ぬ」が、我々は「殉教者として死ぬ」と彼は言った。これは、祖国であろうと神であろうと、自分を越えた、尊いものをもっている者の言うことである。無神論者や唯物論者はこんなことを言わない。自分を超えているが、自分自身を導き、自分の根源であるものを持っていて、生きる意味と価値を知っている者——そういう者だけが国家の指導者になれる。

「何？ 殉教者？ この時代に何と馬鹿げた、時代遅れなことを！」と、馬鹿げたことを言う人々は、今、構図的には、日本を含めた西側にいる。そう言わないと、それは「政治的に正しくない」からであって、哲学、すなわち根本的な考え方として間違っているからではない。これに関して、ごく最近、ちょっとし話題があった。アメリカの Megyn Kelly (メイガン・ケリー) という有名な美人キャスターが、突然辞職した。彼女は、少し前にプーチン大統領と公開討論をしたが、気の毒なほどに何も言えなかった。彼女は辞職の理由として、自分は 2 つに分かれて戦っているアメリカの現状を、ますます悪化させるような仕事はしたくない、もっと理解や愛があるべきだ、political correctness (タテマエ) に縛られたくないと言った。国連大使を辞めたニッキ・ヘイリーも、根本ではそう思っているであろう。

ロシアは、ナポレオンと、ヒトラーに侵略され、特に後者によって莫大な犠牲者を出しながら、ついに逆襲し追い返した歴史をもつ。その過去を背負った、思いの深さがなければ、ロシアという国家はなく、今度三たび、米-NATO によって、地球最後の決戦を挑まれたプーチンの、この言葉の重い意味はそこから来ている。神側とサタン側の霊的対決という解釈を軽蔑する人は、正しい歴史観をもつ人ではない。ここを乗り越えるには、我々が助かることを考えるのではなく、我々の生き方を、(ある人が言ったように) 経済や国家の仕組みなども含

めた“全体でリセット”しなければ、生き残れないということである。

1987年に、レーガンとゴルバチョフの間で結ばれた、中距離核戦力全廃条約（INF条約）の一方的破棄を、ジョン・ボルトンに押し切られたトランプ大統領が宣言した。レーガン大統領のアドバイザーであり、この条約を成立させたことを誇りにしているP・C・ロバーツ（このサイトで何度も引用紹介している）が、「まるで西洋映画のようだ：最後の対決がいよいよ起こる」という論文を、Information Clearing Houseに書いている。このかつて米政府の中枢にいた反米警鐘家は、特に宗教的ではないにもかかわらず、現在のワシントン政府の実態を「純粹悪」unadulterated evilと呼んだ人だが、今度はこの恐るべき情勢悪化を「西洋映画」に喩えている。これは、現実世界が筋道のついた演劇のように進行している、ということで、私もこの観点を何度か説明した。今起こっていることが、あまりにも「狂気じみて」「馬鹿げている」ので、それは芝居のようで、その最後も、芝居のような大詰め（showdown）を迎えて終わることが、ほぼ予言できる。ただそれが、どの程度の戦争になるか、比較的被害が小さくて済むか否かは、我々の意識変化と覚醒次第であろう。

私はかつてこのように書いた：――

… それは、このような悪人たちに芝居をやらせて、何かを学び取らせる、何者かの意志が働いているのではなからうか？ イルミナティ最高の哲学者と思われる Hidden Hand の、「悪役を演ずる人々」という説明が、ここにつながってくる。「神は曲がった線を用いてまっすぐに書く」という諺も同じ意味である。ここでも『マクベス』の有名なセリフが、見事にその事情を説明する：「それは阿呆の語る物語で、音響や怒号に満ちているが、そこには何の意味もないのだ――」マクベスは最初から、自分の運命を、心の奥では知っていた。今、シリアを攻めているマクベスたちにも、同じ心理が働いているはずである。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/180413.pdf>

まさに「狂気じみて」「音響や怒号に満ちている」という体験をしたのは、先日のブレット・キャバノー事件であった。しかし全員が狂っているのではなく、メイガン・ケリーのように「理解と愛があるべきだ」と言っている人々もいた。ただ、悪魔的狂気がアメリカだけでなく、世界を覆っているのは確かのようなのである。（我が国のいじめや虐待の増加にも、その影響があると十分考えられる。）数日前のアレックス・ジョーンズ番組によると、アメリカでは魔女が急に増えて、トランプやキャバノーを呪う者が沢山いると言っていた。これに対して、守護の祈りをする人たちが、その現場に押しかけているという。また、ローマカトリック聖職者のベドフィリアでも、一般人のそれでも、悪霊が働いていることは、ほぼ間違いないと思われる。子供への性犯罪を、自分でなく悪魔のやったことだと、はっきり言った聖職者もいる。これはあらゆる状況証拠から、ウソの供述ではないと思われる。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/180814.pdf>

また一般人で、何者かに取りつかれ、教会に助けを求める者が多く、対処しきれなくて、エクソシストの大量養成を求めている、アイルランドの司教の例もある。さらにイギリスの首都ロンドンでは、ナイフによる刺傷事件が異常に多く発生し、警察は対応を諦め、市民が自衛していると言われる。また、この同じ事態は、中国でも同じようにひどいと言っている。こうした異常事件は一々翻訳紹介しないが、枚挙にいとまがない。霊的な力を持つ悪魔とかサタンとか言われる者が、確実に存在することが、ここほんの数年でわかってきた。そういうものを否定し、また悔ることによって、無意識の内に彼らの跳梁する条件を作るようなことだけは、やめるべきである。